
黄金の堅武斗虫 ~ミクロムーン島に眠る秘宝~

るーずりーふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の堅武斗虫 ～ミクロムーン島に眠る秘宝～

【ZPDF】

Z0881Z

【作者名】

ルーザリーふ

【あらすじ】

五人の子供達がつくりた「チーム」での友情とバトルの話。楽しく遊んだ「あの日」を思い出すよつた、そんなお話。

・・・かな？

黄金の堅底斗虫

小れ毛円の形した
島に集まる堅毛武者
金に輝くその姿
月にも負けぬ美しさ

「せん」～～！ ブラックレモンカスター～～諸君～～
われわれ「ゴールデンビートルズ」が宣戦布告に参上した！
ポルデリートで決着をつけようではないか！
ただし、強制はしない！

のるか、ひくか、10秒後に叫べ～～

じゅ～～～、きゅ～～う、は～～ち・・・・・・
・・・・・・や～～ん、に～～い、い～～ち、

返答～～

「参りました・・・・・・」

「ひつて、俺たちの張り場はどんどん大きくなつてこつた。

ある大雨の日のこと。

俺たちは本部である「駄菓子屋」になつて、「でこつものようにせざ

ていた。

「さて、今日は雨が降つててなんか気分が乗らないから張り場の拡張はいつたん休止にする。

いいか？」

「うえーい。」

ガムをクチャクチャさせながらやる氣がなさそうにコードーに

どうちだかわからないこれまたやる氣のない返事をする俺たち。

ここ一週間はずつとこんな感じだ。

張り場を広げるわけでもなく、作戦を練るわけでもなく。

駄菓子を右手にマンガを左手に、ただダラダラと時間をつぶしていった。

まあそうなつてしまふのもしょうがないといえばしようがないのだ。

1年前、偶然同じクラスになり、偶然席が近くなつた5人で冗談半分のチームをつくつた。

名前は「ゴールデンビートルズ」。

これも、誰だつたか忘れたがメンバーの一人の

「なんか、カブトムシってかつこよくね？」

という一言でテキトーに決めたものだ。

つまり、当時では珍しいどこまでもゆる~いチームだつたのだ。

俺たちは「駄菓子屋こなつ」を拠点に少し小さめの張り場を決めて

毎日そこに集まつた。

周りのチームが張り場争いに大奮闘していても、俺たちは関わらなかつた。

張り場の広さなんか気にしなかつたからだ。

しかし、張り場争いはどんどん勢いを増していく、

「ゴールデンビートルズ」もこれに参加せざるをえなくなつた。

争いに負ければ張り場を吸収されてしまうからだ。

そして、バトルを繰り返していくうちに俺たちは気づいた。

『この張り場争いってやつで、負けたことないじゃん!』

そう、「ゴールデンビートルズ」は自分たちの想像以上に強かつたのだ。

それからすっかり調子に乗つた俺たちは周りのチームに次々とバトルをしかけた。

俺たちはいつの間にかこのバトルにハマつていたのだ。

連戦連勝の優越感に酔っていたのかもしない。

気づいたら、敵は一人もいなくなつていた。

途方もなく広い張り場と虚脱感だけが残つた。

結局、俺たちは吸収した場所に足を踏み入れることもなく最初と全く変わらない広さのまま、張り場での放課後を消費した。きっと、張り場争いは俺たちの生き甲斐？ みたいなモンになつていたんだ。

生き甲斐をなくした「ゴールデンビートルズ」はもうダラダラすることしかできないのかもしれない。

「アンタから、子供なんだからもうちよつと元気になりなさいな。前はあんなにさわいでたのに、最近はめつきりおとなしくなつて・・・

そんなにダラダラしてたら、そのうちダラダラ星人になっちゃうよ。それでもいいのかい？」

店の奥からおばちゃんが声をかけてきた。

「ダラダラ星人って・・・」

誰かがつぶやくとおばちゃんがこつちにやつてきた。

「アンタから、ダラダラ星人ナメちゃいけないよ。

ダラダラ星人になるとね、毎日毎日やる気がでなくて寝つころがつたまんま腐つていくんだから。」

あーやだやだ、と首を振っているこのおばあちゃんは

「駄菓子屋っこなつ」の店主だ。

すなわち駄菓子屋のおばちゃんである。

おばちゃんは「ゴールデンビートルズ」結成時から

ずっと俺たちのことを見守ってくれている一番の理解者だ。きっと元気のない俺たちを心配しているのだろう。

「そんなこと言つたつておばちゃん、なにしたらいいかわからんないんだよ。

明日が見えないんだよ。」

リーダーが絶望的な声で言った。

「うわあ、生意氣いってるよ！」それだから最近の子は。おばちゃんは、しょうがないねえ、と首を振りながら奥へひっこんでしまった。

なにやらがさーん」と音がする。

店の奥の方、さつきおばちゃんが引っ込んだときからだ。

「おいやス、なにやつてんだろ、おばちゃん。」

隣の西村智樹 = 一シが小声で囁いてきた。

「さあ、そろそろボケてきたか？」

適当に返すと、反対側の柚木聰留 = ノズが食いついた。

「え？ そうなの？ やばいじやん。」

「いや、まだわかんないけど。」

「なになに、何の話？」

鶴見渚 = ツルも加わり、ひそひそも大きくなつてぐる。ざわざわが広がる。

ここまできて、リーダーが何も言わないはずがない。

竹本勇大 = タケが口を開いた。

「おまえら、うるせーんだよ！ 今いいとこなん・・・・・・

が、それはバーンという音に遮られた。

「アンタら、これを見な！」

正面の壁に押しつけられた紙が田に飛び込んでくる。

「なんだよおばちゃん、びっくりせんなよ。」

リーダー以外全員の口が閉じた。

「いいかい、これはね、古くからこの島に伝わる歌なんだよ。もうこれを歌える人はいなんだけどね、

伝説になつて残つてるっていう、ありがた~い歌なんだよ。もしかしたらほんとにいるかも知れないよ。」

おばちゃんはまだ何か言つているリーダーに紙を渡した。みんなの頭が集まる。

それにはじなんことが書かれていた。

小わらわ円の形した

島に集まる堅き武者

金に輝くその姿

円にも負けぬ美しさ

「小わらわ円の形した島つてこののが
じいじ、ミクロムーン島だつてこのはわかるね？

堅き武者つてこののはカブトムシのじいなんだよ。
それが金に輝くつてこのじいとは？」

「ホールデンビートル・・・・・・

ニシがつぶやいた。

「ね、じいには黄金の堅武斗虫がこるんだよ。

甲虫じゃないよ、堅武斗虫だからね。」

耳で聞くだけじゃじうちがうのかわからないが、
じの際そんなじうじうでもいいが。

「お、おばちゃん、耳で聞くだけじゃじうじうのかわかんない
んだけべ。」

ゴズ・・・・・・

おばちゃんが無視して続ける。

「せらアンタらのチームとやらの名前ともおんなじだし、
じいじだラダラ星人になるよりはましドショ。
わがしてくれば？」

男の子つてカブトムシ好きだよね、それが金ピカなんだよ。
ほら、探しに行つてじよつー。」

なんか急に若返つたようなおばちゃんに押されて、
俺たちはまあいいかなーと思つていた。

ただ、タケだけはちがつた。

「だーれがそんなのにのせられたとおもつてんだ。

黄金のカブトムシなんてホントはいないんだろ？
その紙だって、さつき書いてきたにきまつてる。

もともといないモン探すなんてそんなことほしinないんだよ。

ああー、これだから鈍感君は困るんだ。

それだつていいじゃないか。

黄金のカブトムシなんていなかもしれない。
でもおばちゃんは毎日ダラダラして俺たちを心配して
わざわざこことしてるんだから。
そのくらい察しろよなまつたく。

俺は心の中で溜息を一つしてからリーダーに言つた。

「俺、聞いたことあるんだけど、黄金のカブトムシ。この前ことこ
が見たつて。」

こんなのがまつてゐる。

でも、司令塔と呼ばれる俺の言葉をみんなが信じないわけがない。
「おいヤス、それホントか？まあそうだよな、ヤスが言つんだもん
な・・・・・・」

考え込むリーダー。

よし、かかつた。あともうちょいだ。

「まあいいんじやないの。もし見つかんなくつても一夏の思い出つ
てやつになるし。」

こういうかつこいい言葉にタケは弱い。これで決まるひとはまちが
いない。

しばらくして、タケが言つた。

「よし、じゃあ行つてみるか。みんなで一夏の思い出をつくれりつせ

！」

「おーっ！」

ふつ、チョロいな。

俺は心の中で不敵に笑つた。

男子とはカブトムシを追い求める生き物である。

これは古来からの属性だ。

このチームに例外はいなかつた。

俺、ヤスこと安川涼もふくめて全員。

こうして俺たちの戦いの火ぶたは切って落とされた。
ただ、これはまだほんの始まりの始まりであった。

いつの間にか雨は止んでいて、道路の水たまりに虹がかかっている。

「おばちゃん、ありがとねー。」

リーダーのタケが紙をひらひらさせながら「駄菓子屋になつつ」を出た。

「お前ら、行くぞ！」

おおー、やる気満々だねー。

ただ、状況を理解していない者が一人。

「いくつて、どこにさ。」

ユズが訊ねた。

どこまで話をきいてないんだろう。

でもそこはリーダー、かけ声を一つ。

「黄金のカブトムシー！！」

「ゴールデンビートル！！」

それは突然やつて來た。

こんなこと誰が予想した？

俺たちがいざカブトムシを捕りに行かん、と
勇んで歩き出した時のことだ。

「キ、キー・・・・・」

背後で急ブレーキの音。

何があつたのかと一緒に振り向く。

俺たちが目にしたのは、

自転車にまたがつた三人の少年たちだった。

「これはこれは、もしかして君たちがゴールデンビートルズか？」

右側の少年がいきなり芝居つぽい口調で話し出した。

なんだ、なんだ？誰だこいつらは。

俺たちの間に緊張が走る。

続いて左側。

「噂に聞くところ、このあたりの張り場をすべて吸収したとか。」

また芝居口調だ。

イライラするからやめてほしいんですけど。

そして、真ん中。

「少し話がしたい。」

タケが一步進み出る。

「竹本勇大、こここのリーダーだ。」

話の前に訊いておく、お前たちはなんだ。」

おおっ、きまつてゐねー。

右側が肩をすくめ、首を振る。

「おやおや、われわれを知らないとは。ここは情報の伝達が遅いようだ。」

なんか本気でイラッときた。

俺の両隣で歯ぎしりの音。

次に左側。

「それとも、外のことになど関心もないということか。」

そこまで聞いたとき、俺はイライラしているだけではいけないことに気づいた。

そうだ、俺はこのチーム唯一の頭脳派。やつらを分析する役目がある。

今までの状況と言葉から、真ん中の少年がリーダー格であることはまず間違いない。

そしてこの態度。

よほど自分たちに自信があるのか、それともただ威勢を張っているだけなのか。

まだわからないか。

あとは先ほどのセリフだ。

話の流れから察するに、「外」というのが俺たちの張り場の外であることは明らかだ。

ただ、自転車に乗っていたところからすると、島の外から来たわけではないようだ。

ミクロムーン島で俺たちの張り場になつていらない場所。やつらはそこからやつて来た。

真ん中の番だ。

「知らないのなら仕方がない。こちらだけ情報を持つてるのは不公平だからな。」

とうとう名乗るか。あーーー！

「いばらすすき！」

「きさらぎかなた！」

「じんぐりじいぶき！」

「——われら青空決死隊！！！」

今までの順番を忠実に守り3人は名乗った。

それぞれの名前あと最後にバシッとポーズを決めるこの名乗り方・
・・・・・

チームか！

ということは、俺たちのまだ知らない市外チームだろう。

それにもしても、この息のあつた完璧なパフォーマンス。

すすき、かなた、いぶき、それぞれの頭文字をとつた「スカイ」から

の

「青空決死隊」というチーム名。

俺たちがテキトーに決めた名前とはくらべものにならない。

『並のチームじゃない。』

みんなもそう感じたらしい。

俺たちの間に緊迫した空気が流れれる。

タケが目配せをした。

そうだ、こっちも名乗らないと。

俺は息を吸い込んだ。

「 やすかわりよ! 」

「 こしむらもとき! 」

「 ゆずきとくる! 」

「 つるみなぎれ! 」

「 たけもとゆうだい! 」

「 「 「 「 「 われら、ゴールデンビートルズ! 」 」 」 」 」

よし、ポーズもキマつていい感じだ。

どうだ、とばかりに相手の方を見やる俺たち。

しかし、青空決死隊はそんなこと氣にもしていないようで、あのムカつく芝居口調で平然と話し出した。

「 話というのはもちろんバトルのことだ。 」

「 それぞれの張り場をかけた神聖な戦いをしようではないか。 」

「 戦利品には事欠かない。 」

こちらも君たちと同じくらいの広さを誇る張り場を持つている。 「 こちらも君たちと同じくらいの広さを誇る張り場を持つている。 」

なに!? 今なんて言つた! ?

まさかあいつらも張り場争いを勝ち抜いたとでも言つのか! ?

「 お互い大きい勝負ゆえ、恨みつこ無しの三回戦とする。 」

「 内容は全てそちらに任せるとしよう。 」

「 さあどうする。 るるか、ひくか! ? 」

張りのある声が余韻を残して消えた頃、俺たちは叫んだ。

そんなの、きまつてゐる。

「 「 「 「 「 もの勝負、受けた! ! 」 」 」 」 」

「 まつさか、市外にあんなチームがいたなんてなー、思わないよなー。 」

ツルがオレンジ味のアイスをなめながらつぶやく。

あの宣戦布告から一日が過ぎ、今日は「 駄菓子屋! 」になつて作戦会議だ。

昨日、情報収集担当のツルがあちこち駆け回つてくれたおかげでなかなか興味深い情報をたくさん手に入れることができた。

それによると、あの「青空決死隊」は隣の市で大暴れしている最強のチームだといふことらしい。

俺たちと同じように、張り場争いに勝ち続け、

とうとう一週間前、市内の張り場を全て吸収し、

それでも飽きたらず隣の市にも手を出した、と。

なんでも、そのリーダーであるじんぐうじいぶきは

この島でも一番の起業家、神宮司グループの御曹司らしい。

中でも一番驚いたのは、あの時いつも一番最初にしゃべってたやつがなんと女だったということだ。

たしか、いばらすすきとかいうやつだ。

男だとちょっと高めで女だと低めな声と、

男だとちょっと長めで女だと短めっていう中途半端な髪型のせいな

のだが、

そんなことも見抜けなかつたとは、俺の目も悪くなつてきたか。そして残る一人、きさらぎかなた、こいつが謎に包まれている。彼のことを誰に訊いても、核心を突く答えが返つてこなくて、まともな情報が何一つ入つてこなかつたという。

それに対して、女のいるチームなんて聞いたこともない。自分から仲間に入れてくれと頼む勇気があるのは認めよう。ただこの張り場争い、女にはちょっときついぜ。

ガラガラっと店の引き戸を開ける音

「ただいま。」

「青空決死隊」のリーダーとの打ち合わせをしに行つていたタケが戻ってきた。

「どうだつたんだよ。」

ニシが待ちきれずに訊ねる。

「勝負は明後日。時間は午前八時。あいつらがここに来る。内容は三種類、俺たちが全部決めていいらしい。

勝てば張り場が増えて、負ければなくなる。」

言い終えて、タケが心配そうにこちらを見てきた。

「ヤス、この勝負、受けてよかつたと思つが？」

俺は少し考えてから答えた。

「よかつたんじやないの。ちよつと暇してた感じだし。それに・・・

・・・

言葉を切る。

そう、いくら敵が強くてもいいじゃないか。

負けたつていじやないか。

ここでいつまでもくすぶつてこるよりは。

「聞いてくれ、いい考えがある」

勝負はもうすぐだ。

弱気になつてどうする。

ゴールデンビートルズは絶対不滅だろ？

戦闘開始

晴れ上がった空に入道雲、

じりじりした暑さと時折吹きすぎる生暖かい風。

「これより、『ゴールデンビートルズ対青空決死隊のバトルを始める。」

「一種目め、ポルテリート！」

「いや、神妙に勝負！」

夏真つ盛りの今日、過去最大の張り場争いはとうとう幕を開けた。

張り場争いで最もよく行われる種目の一いつとされ、

時には運によつて勝敗が大きく左右することもある、市販のカードを使って繰り広げられる壮大な頭脳戦。

つまりトランプの神経衰弱の応用。

それが、ポルテリート。

この勝負が、ほとんど俺の腕にかかるといふても過言ではない。

責任は大きい。

全員で円になり囲つているのは、バラバラに散らばつたたくさんのカード。

その数、200枚。

この中からたつた一組ずつしかない

同じ絵柄のカードを探し当てなければならぬ。

「じゃん、けん、ほんっ！」

いにしえより伝わる公平な儀式によつて順番はこうなつた。

ユズ タケ じんぐうじいぶき ニシ あわらぎかなた いばらす
すき ツル 僕。

どうやら運はこちらに味方しているようだ。

一番手のコズは頭の働きは鈍いが、天性の強運の持ち主。滅多に当たることのない一番手にうつてつけの配役。

そのあとに青空決死隊の三人が続かなかつたのが残念だが、まあいだらう。

あとは座り方だ。

このゲームの原則として、全員がカードを引く順番で円になつて正座、

というものがある。

ここでも運はあった。

この場で唯一の女子であるいばらすすきのとなりに座るのは

チーム自慢の美男子、ツル。

男の俺から見てもアイツのルックスはルール違反だ。いばらすすきがなびかないはずがない。

もしかすると集中力が切れ思わずミスをしてくれるか、はたまたこれから先の情報提供者に寝返る可能性もないでもない。そして極めつけは、この俺がラストに回ってきたというところか。コズの強運でカードを稼ぎ、俺の記憶力で、取れるカードを全てかつさらう。

ツルの存在も大きい。

この勝負、勝つたな。

ゲームはコズの2連続先取から始まつた。

いつものことながら感心する。

200枚のカードの中から何の情報もないまま勘だけを頼りに一組も当ててしまうのだから。

それからは何の進展もないまま一巡回が終わつた。

さすがにこの少ない情報の中でカードを当てることができない。

俺の出る幕はまだないようだ。

「巡回、巡回と、じんじんカードはめくられていったが、ユズが一回に一回くらいの確率で当てる以外には誰もカードを取ることはできなかつた。

そして、ゲームは五巡回にさしかかり動きを見せた。ユズが外したカードをタケがフォローしたのだ。

タケ、ナイス！

俺は心の中でガツツポーズ。

しかし、じんぐうじいぶき、いぱらすすきも一組ずつ取つて追い上げてきた。

カードもけつじめくられていこる。

そろそろだな。

記憶を探る。

五巡回のラスト、俺の番がやつてきた。

大丈夫、いける。

今までのカードの出現状況を片つ端から思い出し、取れるカードを全てめくつていった。

収穫は、八組。

これで青空決死隊と大きく差をつけた。よし、いいぞ。

みんなから称賛と驚嘆のまなざしを浴びつつ、俺はほくそ笑んだ。しかしその六巡回で、俺は自分の甘さに気づかされる事になる。ニシが外したことから始まつた六巡回は、誰もカードを取ることなく進んでいた。

そして、三番手である青空決死隊リーダーのじんぐうじいぶきの番。そこで、事件は起つた。

自分の足下にあつたカードを引き、

直前にタケが引いたカードと合わせるじんぐうじいぶき。

俺もそこまでならマグレだと思ったさ。

でも彼の手は止まらなかつた。

さらに一組目、三組目と次々にカードを取つていく。

その数、五組。

それは、俺の頭がインプットしている現段階で取れるカードの最大枚数だつた。

冷たい汗が頬を伝う。

まさか、アイツも今まで出たカードを全て記憶しているというのか？
その通りだつた。

何回順番が回つても、じんぐうじいぶきは取れるカードの最大枚数を持つて行く。

それにもない、俺が取るカードも少なくなる。
もはや、この勝負は俺の一人勝ちにはならなくなつてしまつたようだ。

カードも残すところあと96枚。
ゲームは中盤を迎えていた。

ポルデリートはここからが速い。

俺がいっぺんに大量のカードを取つていくからだ。
いつもなら。

ただ、今日は違う。

頭の切れるやつがもう一人いるせいで、カードもいつもの半分ずつしか取れない。

しかし、負ける心配はしていなかつた。
あることに気づいてしまつたからだ。

それは、カードを引く順番。

俺からじんぐうじいぶきまでの間には、

ユズ、タケ

の二人。

じんぐうじいぶきから俺までの間には
ニシ、きさらぎかなた、いばらすすき、ツル
の四人。

自分の前にカードをめくる人数が多い方がたくさん情報を得られ

る。

つまり俺の方がたくさんカードを取れるのだ。
さらに、こちらには強運のユズがついている。
負けるはずなどないのだ。

10分後。

「勝利チーム、『ゴールデンビートルズ』

五人の歓声があがつた。

一つ残念だったのは、

いばらすすきがツルに興味を示さなかつたこと、そのくらいか。

「一種田田、サイコキネシス。」

「いざ、神妙に勝負！」

とうとう始まつた一回戦。

サイコキネシスは100%体力勝負のゲームだ。つまり、俺が役に立つことはほとんどない。

むしろ足手まといになるだろう。

いないほうがいい存在へと成り下がつた俺は、戦場の端っこでおとなしく目立たないよう頑張つていた。

「3、2、1、GO!!!」

お、どうやら始まつたようだ。

みんなが一斉に広場全体へと広がつていく。

たつた今から、ここはすさまじい戦いが繰り広げられる戦場となる。

このゲームの説明を少ししておこう。

サイコキネシスはポルテリートと同じ三大ゲームの中のひとつでまず体力、次に判断力、そして精神力が重要になつてくる過酷なゲームだ。

まず、戦場となる広場をきれいに半分ずつに分け、そのどちらかをチームの陣地にする。

もう一つは敵の陣地だ。

そして、自分達の陣地にドッジボールを一つ置く。

それから、全員が口に赤い布をくわえる。

これで準備は終わりだ。

両チームの準備が終わつたら、カウントダウンでゲームはスタートする。

そうしたら、あとは敵の陣地のボールを奪いに行くだけだ。

しかし、敵陣に乗り込んだ際、くわえている赤い布を取られてはいけない。

その時点で自分の攻撃は終わってしまい、陣地に戻らなくてはならないのだ。

そして、同様に敵もボールを奪いにやってくるから
こちらは攻めてきたヤツのくわえる布を取ればいい。
そうして取った布は全て自分たちの物になり、
攻撃に失敗したら、代わりにその布を使ってもう一度チャレンジで
きるのだ。

ボールを奪つて、布を取られることなく陣地に戻つてこられたらそ
のチームの勝利となる。

先ほどのポルデリートでは俺たちが勝利した。
ここで勝てば3試合田をする前に勝負はつく。

ただいまゲーム開始三十秒後。

両チームにらみ合いが続いている。

ゴーラーテンビートルズはいつこつに動くそぶりを見せないが、これ
は正解だ。

ここで出て行つても何も収穫はないだろう。
こつちが優勢なうちは慎重に行つた方がいい。
そうなると気になるのは相手チームだ。
さて、どんな出方をするのやら。

試合開始一分後。

青空決死隊が動いた。

さきがけは、いばらすすき。

しかし、すぐにタケに布を取られてしまつた。
やはりここは様子見できたか。

あの二人は動かないが、タケの素早い対応を見て出しうつっている

ようだ。

よし、チャンスだ。

ここで攻めるしかない！

「『一！』

タケの大声で攻撃の合図が出た。

すぐに強運のユズが走り出す。

敵の間をするりすると交わしていき、ボールから敵を遠ざける。

続いて俊足のニシ。

敵陣の外周をぐるぐる回って、敵を混乱させる。

それから第六感の持ち主、ツルが絶好のタイミングを見計らってタケに合図をする。

そして、屈強なタケがボールを取って布を何度も引っ張られながらも取られることなく見事、陣地に戻ってくる。

そして、ものの三分間でゲームは終了する。

そう、いつもなら。

「『一！』

タケの合図が出た。

ユズが走り出し、いつもの強運で敵をかわす。

ニシも出た。

やはりいつものように敵陣を回る。

青空決死隊の三人はいきなりの攻撃について行けていないのだろう

防御がワンテンポ遅れている。

このままいけば、勝てる！

そう確信したときだった。

ユズの合図で飛び出したタケが一瞬で布を取られたのだ。

あのタケが！

俺は信じられない光景に我が目を疑つた。

タケを破つたのは、きさらぎかなた。

ツルの情報収集に引っかからなかつた謎の男だ。

何でだ。

タケが布を取られたことなんて今まで一度もなかつたのに。
それを一瞬で・・・・・

一体何者なんだ、きわらぎかなた。

一気に体勢を崩したゴールデンビートルズは一目散に陣地へと戻つてきた。

みんな不安そうな顔をしているが、それもそのはず。
実を言うと俺たちの作戦らしい作戦といえば、さつきのが一つだけなのだ。

今まで、この作戦に勝てるチームはいなかつた。

だから他の作戦なんてもうないし、

これから新しい作戦を立てるなんてのは不可能だ。

もう一度同じ戦法でいくことはできるが、

そんなことをしたら今度は確実に全員の布を取られるだろ？

みんなが頼みの綱である司令塔、俺にチラチラと視線を送つてくる。
どうしようか・・・・・

限られた時間の中で作戦を立て、

それを敵にばれないようチーム全員に知らせる。

いつ攻めてくるかもわからない敵の動きにビクビクしながら

これらの動きができるだろうか。

・・・・・

・・・・・無理だな。

作戦のこと注意が向いている隙に攻められるのがオチだ。
でも、このまま何もしなくても奴らはきっと攻めてくる。
防御仕切れる自信もない。

勝てる望みはもう限りなく少なくなつてきている。

無駄な体力はなるべく使いたくない。

ここで出てくる考えはただ一つ。

それは、敗北宣言。

張り場争いにおいて、最も屈辱的な行為とされてきたこの敗北宣言を俺たちもとうとう使わざるを得なくなつたようだ。

そして・・・・・

「「「「参りました」」」

五人の声が上がつた。

ゴールデンビートルズ初めての惨敗である。
しかし、これは体力温存のための敗北。
次に繋げるための敗北なんだ。

この屈辱を無駄になんかしないぜ？

残念だつたな青空決死隊。

次の勝負、負ける気がしない！！

「ゴールデンビートルズ、次の種目は何だ。」

「まだ聞かされていないぞ。」

「ポルテリート、サイコキネシスときたら、次はやはりネブチューンか？」

青空決死隊の三人が訊ねてきた。

俺の考えた通り、あつちは三種目を宣言した時に俺たちがバトルの定番である三大ゲームを律儀にチョイスすると思つたらしい。

そう、俺だつて始めはそれを考えたさ。

でもこのバトルはただの張り場争いなんかじゃない。

俺たちには張り場の拡張なんかどうだつていい。

これはお互いのプライドをかけた真剣勝負なんだ。

絶対に負けるわけにはいかない。

タケが一步進み出る。

「宣言する。三種目は、宝探し。」

そう、これが俺の思いついた名案だ。

青空決死隊はまさかのチョイスに啞然としている。

そりやそうだ、こんなに大きなバトルの最終種目に

流行つてもいいし、そもそもバトル種目であるのかさえ定かでない

しょぼい宝探しを選んだんだから。

「お前達、正気で言つていいのか。」

「この勝負は捨てゲームにはできないことくらい知つてているのだろう?」

「一言は認めないぞ。」

慌てる彼らに対して冷静なタケ。

「「」ちは大まじめだ。よく聞け、ルールを説明する。これからチーム対抗宝探しを始める。

開始の合図はお昼の鐘。それが鳴つたら一斉に宝を探しにかかる。範囲は「」、ミクロムーン島全域。

もし宝を見つけたら、この通信機で敵と連絡を取りここに全員で集まり、

それが本物の宝であるかどうか敵チームが審議する。制限時間は六時間。ちょうど夕方の鐘までだ。

より早く宝を見つけ出すことができた方の勝利とする。

そして肝心な宝の正体、それは・・・・・

黄金の堅武斗虫だ。」

「「「「「」」」

・・・・・この空気を何と表現したらいいのだろう。

青空決死隊の三人は唖然とした表情でじっと虚空を見つめ続ける。

だれもなにもリアクションをしない。

言うなれば「無」の時間。

生暖かい風が吹きすぎる。

「無」はタケの一言で壊された。

「のるか、ひくか。」

するとものすごい勢いで青空決死隊がツツコミだしたではないか。

「ふざけるな！おかしな種田を選んだと思つたら

今度は黄金のカブトムシだと！？」

「馬鹿にするにもほどがある！？」

「そんな要求をわれわれは認めない！？」

「「「ただちに考え方！？」」

彼らの叫びが収まる頃、ゴズは言った。

「カブトムシじゃない、堅武斗虫だ！？」

・・・・・「無」の時間がやつてきた。

「ガーン、ガゴーン、ゴーン、ガゴーン」

両チーム一斉にスタート。

やはり速いのはニシだ。

誰よりも速く走り出し、「おーい、速くしろよー」と仲間を急かす。それになんの意味があるのか俺には全く理解できない。

が、彼が動いていないと気がすまない程

このゲームを待ちわびていたことは明白だ。

「ヤス、さつきは助かつたぜ。

あんなふうに説明されたら、

黄金の堅武斗虫つているんだ～って思っちゃうよ。

あのままだつたら宝探し、できなくなるところだつた。

青空決死隊を納得させるなんて、やつぱりお前はすごいヤツだ。」

ツルが走りながら笑いかけてくる。

「イツがすると何でも絵になるな～

などと関係のないことを考えながら俺が答える。

「あのくらじなんてことないさ。俺はこの宝探しにかけてるんだ。奴らとの力の差はほぼ互角。

ここで大事になつてくるのはゲームに対するやる気だ。

この種目以外にやる気で差をつけられるものは、ない。」

ツルに対抗して、親指を立てハードボイルドに笑顔をキメる。

「そうか、そうだよな。みんなが本気で頑張れる種目じゃないとな。

」

ヤツはウインクなんをしてきた。

・・・・・負けた。

わけのわからない敗北感を味わいながら宝探しは始まった。

「ワーダー、ゴールデンビートルズが何を考えているのか、わかりますか？」

「ああ、見当はついてる。」

「さすがリーダー、すごいです。」

「あとはちょっと細工をするだけだ。一人とも、準備はいいな?」

「「はい！」」

一人が走つていったあと、リーダーはつぶやいた、

「安川涼か、見込みはまちがいないな・・・」

意味ありげな笑みを残して。

決戦

宝探しが始まつてから三十分ほどが経過した。

「司令塔としてのヤスに聞く。これからどうするんだ?」

タケが訊ねてくる。

しかし、そんなこと今聞かれたつて俺が知るわけもないのだ。

そもそもこのゲームにゴールがあるのかさえ、わからないんだから。

「さあな。いくらなんでも、いるのかどうかもわからんない虫の居所

なんて

俺が知るわけないし、ここはとりあえず手当たり次第に探すしかな

いんじやん。」

そつして、森から街路樹までを探し廻へすのと、一時間消費してしまつた。

残すは、あと四時間。

「おー、どうするんだよ。ぜんぜんみつかんないー。」

とつとうゴズが音を上げた。

もともとあきつぽい性格なのだからしかたないが、さすがにここまで探してもみつからないんだからもう今までの探し方はあきらめよつ。

残すはあの場所だけ。

「みんな、覚悟はあるか。」

俺は真剣に訊ねた。

きつと、ただならぬ空氣を察したのだろう、

ぐだぐだしていたみんなの表情が一斉に引き締まる。

そして全員うなずいた。

それを見て、俺は思った。

大丈夫だ、いける。

ゆっくりとかみしめるよつて囁つ。

「轟林に、行こ。」

みんなは驚かなかつた。

黄金の堅武斗虫などといつ得体の知れないものがいる場所なんてあそこしかない。

みんなはじめから、わかっていたのだ。

轟林

ミクロムーン島の約五分の一を占めると言われているその森は異常に成長した木々達が密生する、今の科学ではどうにも説明できない場所。

不思議な力に守られた森と呼ばれ、人々に畏れられる場所。そこに足を踏み入れることは、未知の領域に放り出されることを意味する。

そこに、行く。

「おっ、動きましたよ。リーダー。」「ひとりが振り向きざまに言つた。

「どうやら轟林に行くみたいです。」

双眼鏡を持つたひとりも振り向いた。

そして、ひとりは楽しげに脣の端を上げるのだった。

「くー、やるじやん。おもしろくなつてきた。」

おかしな鳴き声がいたるところから聞こえてくる。

木々が葉をざわめかせ、足下はぬかるむ。

初めて訪れたこの森は想像以上に歩きにくい。

「よし、ここからは一組に分かれて探す。

いいな、恨みつこ無しのくじ引きで決めるぞ。

ツル、あれ、持つてるか。」

どこからともなく割り箸を取り出すツル。

「えつ、何で持つてんの？いつ用意したそれ。」

「シの疑問は、「だつて、使いそうな気がしたから。」

というツルの笑顔で切り捨てる。

「この五本の割り箸のうち一本に爪であとをつける。」

言いながら俺はみんなの前でやつて見せた。

ほら、ズルとかあつたと思われたくないし。

「じゃあみんな一本ずつ持つて。」

せーの、で俺が引いたのは、さつき自分で作ったあとつき割り箸だった。

さつと他の四人の割り箸を確認。

あとつき、あとつき、あとつき……

そのとき、声があがつた。

「あつ、これあとつきだー！」

・・・・・なんで、こいつなんだ。

俺は楽しげにスキップしながら歩いているユズを見て溜息をついた。

「おい、危ないからあんまり跳んだりはねたりすんな。
転んでもしらねーからな。」

言つた直後に派手につまずくユズ。

更に大きな溜息が出てくる。

「おーい、だーいじょーぶー？」

立ち上がったユズのひざは、見ているだけでこつちまで痛くなつて
くるほどすりむけていた。

「いつてー・・・・・」

「だから言つただろ。もつちよつと大人しく歩け。

見てるこつちが痛くなる。」

「でも、大丈夫だよ。こんくらいのケガ、三日で一度はできぬし。」

・・・・・恐るべし、自然治癒力。

そしてユズはまたスキップを始めた。

まったく、今日はツいてない。

くじ引きで一人組の方になってしまったのがそもそも運の尽き。
しかも、もう一人がよりもよつてユズ。

いや、ユズが嫌いな訳じやないんだ。

その運の良さもありがたい。

ただ、こいつと一人だけでなんかをするつていうのは・・・・・。
なんていうか、一人でするより五倍キツイ。
ポルデリートみたいに単純なことを繰り返すんだつたらいいんだ。
でもこれは未知の森で未知の生物を見つけなければならぬ。
複雑なこと山のごとし。

運の良さだけでは、その天然キャラをカバーしきれないのだ。
あああ、どうすればいいんだ。

「ヤス、大丈夫かな。」
ニシが誰にともなく言った。

だって、あのユズを連れてこの森を探すなんてのは至難の業。
さすがのヤスでも途中でいやになるに決まってる。

「さあ、どうだらうな。

でも、くじ引きの言い出しつペはあいつだし、どうなつてもそれは
あいつの責任だ。」

「なんだよタケ、冷たいじやん。」

いつものタケらしくない発言につつこんだのはツルだ。

「いや、そんなことない。俺はただあいつのことを信頼してるだけ
だ。」

「そんなこと言つて、ホントは自分があつちのグループじゃなかつ
たことに安心してゐくせに。」

「なんだと?」

「大丈夫だよ。あいつならなんとかしてみせるぞ。」

険悪になりつつある空気を和やかに閉じきせるのはニシの役目。
そして、誰もしゃべらなくなつた。

ただ黙々と前に進む。

おおいしげる植物をかわしながら。

時々きこえる奇妙な鳴き声におびえながら。

時にはつまずいたり、滑つたりもした。

『ここには得体の知れないモノがいる。』

はつきりとはわからないが、人間が入つてきていい場所などではないことに

そろそろ三人は気づき始めた。

沈黙の中、不安は大きくなる一方だつた。

「リーダー、なんか重つ苦しい空気になつてきましたよ。あの三人。

「双眼鏡を持った一人が言った。

「そろそろなにかしましようよ。見てるだけじゃ退屈だし。」

「ちやつかりおやつを食べ始めた一人が言った。

「いや、お前なに一人で食つてんの、ちょっとくれよ、いや、やつぱいいやめとく。」

「…………では、いこつか」

「「うじゅーーー！」」

三人は草陰から飛び出した。

最終決戦（前書き）

最終話です。

最終決戦

～午後4時50分 草陰～

「A地区、準備完了。」

「B地区、準備完了。」

「よし、あとは待つだけだ。」

～午後4時52分 沼池～

さつきから無言の時間がどれだけ続いただろ？
もつもつ、みんな限界のはずだ。

いや、俺は限界だ。

ツルとタケは相変わらず険悪だし、何だか霧まで出てきたみたいだ。
5メートル先が全く見えない。

おい、この空気、どうにかしてくれよ…………

絶望しかかったその時、先頭を歩いていたタケの声があがつた。

「うわっ、なんだこれっ！！」

次の瞬間、踏み出した俺の右足が何かドロッとしたものに包まれた。
横でツルもギョシとしている。

ドロドロはどうん右足を引きずり込もうとする。

俺は慌てて、まだ固い地面についているはずの左足を踏ん張った。
徐々に足が引き上げられ、最後に「ズボッ」という音がして
やっと俺の右足は助かった。

どうやらこれは沼池らしい、その端っこにあしをつっこんだのだ。
まさに危機一髪、ドロドロの餌食にならずにすんだらしい。

しかし、ツルはやつではなかつたようだ。

「わっ！ しつ、しずむ、しずむっ！ たすけてくれっ！！」

そう言いながらドロドロに下半身を持って行かれたツルは
ばたん、ばたんと腕を沼池の水面に打ち付けるが体は沈んでいく

方だ。

ああ、やつぱりここは運動神経の差だな。

「おい、一シ、なにボーッとしてんだ。引っ張れ！」

俺は、とっくにはい上がっているタケと一緒に、暴れるツルを引っ張つた。

30秒後。

「わー、助かった・・・・ありがとな、二人とも。

「つたく、もつと鍛えとけよ。」

笑つたツルの背中をタケがたたいた。

おお、さつきまでの険悪なムードが消えていく。

ハグニングに感謝だ。

（午後5時15分 神樹）

「いつてー・・・・・・」

ユズが転んだのはこれで5回目だ。

「気をつけるよー」

いちいち大丈夫か、なんて聞くのも馬鹿らしくなつてくれる。
その足には青いあざができる、赤い血が流れ、いたるところに傷がで
きていて、

これで本当に歩けるのかつて思つけど、当の本人は意外とけろつと
しているのだ。

「まあ、これでケガ1週間分かな。」

なんて言つていた。

恐るべし生命力。

「いつてー・・・・・・」

おつ、6回目。

ユズがまた転んだ。

どうやらなにかにつまずいたようだ。

見ると、そこにはでこぼこした茶色い電柱があつた。

これは・・・・・根っこ？

いや、そんなはずはない。

こんなに太い根っこがあつてたまるか。
でも、それはどう見ても樹の根っこだつたし、なによりここは轟林
なのだ。

と、いうことは・・・・・

俺はおそるおそる顔を上げていく。

そして見た。

神樹。それは神が宿る樹。

この森の中でもひときわ大きいその樹は、人々からそう呼ばれていた。

その根は大地を支配し、その幹は生命を生み出す。
その枝は空を支え、その葉は全てを包み込む。

俺は絶句した。

まさか本当にあつたなんて・・・・・。

「ねえ、ヤス、これって、しんじゅ？」

ユズが立ち上がりつて上を向いた。

「ああ、そうだ。」

「初めて見たよ。」

「ああ、俺も。」

「・・・・・大きいね。」

「・・・・・大きい。」

俺たちはしばらく、そのまま動けなかつた。

（午後5時05分 沼池）

そいつはいきなり現れた。

俺たちがツルの救出に疲れて寝こんだ時だつた。

「ブワッシャーンッ」

もの凄いしぶきの音を立てながら、そいつは沼池から上陸してきた。
思いがけない出来事だつたからか、

俺たちは動くことも声を出すこともできなかつた。

怪獣が、そこにいた。

魚に足がついた鯨サイズの生き物なんてこの世界にいると思つか?
答えは、いない。

5秒間考えた俺たちは三人同時に逃げ出した。
あれは何なのか、他の2人は大丈夫か、そんなことは頭になかった。
ただ、逃げる。

それだけを考えて走った。
俺の俊足とタケの強足を止めたのは、けたたましい鳴き声と、ツルの叫び声だった。

はっとして振り返る。

濃い霧の向こうに大きな影がぼんやり見えた。

近づいてくるすさまじい足音。止まらないツルの叫び声。

今度も迷わなかつた。

一目散に影に向かつて走り出す。

気づけば、叫び声はすぐそこにあつた。

目の前に、腰を抜かしたツルが座り込んでいる。

「ツル！逃げるぞ！」

そう言つてツルを立ち上がらせたのはタケだった。

いつの間に来たのか、いや最初から一緒に逃げていたのか。

「おい、一シ！手伝え！」

肩を貸そうとしたが引っ込めた。

地響きと共に近づいてきていた影が、もうぼんやりとはしていなかつたからだ。

このまま逃げても追いつかれる。

「先に逃げてろ！」

俺はそう言い残して、得体の知れない怪物の前に立ちふさがつた。
怪物が足を止める。

体は魚、足は鳥、鱗がぎらついて、目は光っている。

改めて見るととんでもない生き物だ。

研究でもしたら軽く有名人にはなれそうだな。

どうでもいいことを考えたが、恐怖がまぎれるわけでもなかつた。
しょ「うがない、ここは気合いだ。

「おー、トリザカナ、かかつてこいよー！」

叫んで怪物をにらみつける。

「ギュエーッズズズズ」

返事のつもりか鳴き声を発した怪物が、大股でこつちに向かつてきた。

危うく踏みつぶされそうになるが避ける。

「わっ！あぶねー！」

安心するまもなくまた襲いかかつてくる。

「ガガガガツ、ギュヤーッ」

今度は余裕で避けられた。

そして、俺は気づいた。

コイツ、頭は悪いみたいだ。

さつきから攻撃といえば俺に向かつてつこんでくるだけだし、
第一、魚と鳥つていう組み合わせからして、
賢い生き物ができるとは考えにくい。
よし、うまくすればハメられる。

「ギュヨエーッ」

走り出した怪物は、まっすぐ俺の方に向かつてくる。

今だ！

俺は体を180度回して、

真後ろ10メートル先にあるはずの沼池に向かつてダッシュした。
地響きが追いかけてくる。

頼む。間に合ってくれ・・・・・・

足音がすぐそこに迫つたとき、霧でかすむ視界に地面と沼池の境界線が入つた。

さつと横に転がり込む。直後
ズシン。

さっきまで俺の体があつたところに怪物の足がめりこんだ。
そして、勢いを殺しきれない怪物は、そのまま沼池につりこんでいた。

つた。

「ギャオエーツ、ギヨーツ、ギュエーツ」

断末魔のようなさまじい鳴き声を残して、

魚のような鳥のような怪物は沼池へと沈んでいった。

「へつ、楽勝ーつ。」

そのまま田の前が暗くなつた。

（午後5時25分 神樹）

「ねえねえ、ヤス、そろそろ行こうよ。時間、なくなつちゃうよ。
ユズがそう言いだしたのは、あんまり神樹を見上げすぎて
二人とも首が痛くなり始めた頃だつた。

時計を確認して俺は絶句した。

午後5時25分。

もうゲーム終了まで35分しかない。

「ユズ、まずいぞ。あと35分でゲームが終わる。」

焦ってきた俺とは対照的に、ユズは落ち着いていた。

「あと35分以内に見つければいいんでしょ。」

そう言って、先に歩き出す。

この時、俺はユズが意外にも強いやつであることをはつきりと感じた。

「どうか、ユズつて、本当はこんなやつだったのか。

その足のケガにも負けないし、すごいな。

背中が光つて見えるよ。

転んで泥だらけの背中が、俺の田にはなぜかピカピカ光つて見えた。

・・・・・・・・・・いや。

そんなはずはない。

いくらなんでもそれはない。

背中が光つて見えるつて何だ。

俺の頭はどうかしてるのである。

そんな一力所だけ光てるなんてあるわけないだろ。

さうとあわただしくカネムシが何がた
うべをうつて重りなり。

二
そ
に
違
い
な
し

あれ、でもこのエガネムシ、やたらテカくないか？
あつ、そうか、轟林サイズってやつだ。

「うわっ、びっくりした!。どうしたんだよ、俺は思ね!」力声なげが出してしまった

「なんだよ、わけわかんない」と言うなって。

「いいから、動くな。」

それから、彼らは北の山中に近づく。

ゆっくりと手を伸ばし、親指と人差し指の間に照準を合わせ、
いけつ！

手に掴んだ堅い感触はやつぱりそうだった。

飛び出たツノ、金に輝くその体。

「ヤス、もう動いてもいいー？」

「ヤス、それ、先にして……」

「やつたなユズ、俺たちの勝ちだ。」

「・・・・・お~い、一シ~。だ~いじょ~ぶか~。」

タケの声で田が覚めた。

え？
俺、気い失つてたの？

「お、目、覚めたな。

そははタケとツルがいた
俺を心配して、ここまで戻つてきてくれたようだ。

「ニシ、ありがとな。助かつたよ。

でも、あんなわけわかんないやつ、よく倒したな。

ツルは腰も治つたみたいだ。

「倒したんじやねえよ。勝手に逃げてつたんだ。」

「ははっ、いくら怪物だつて、シの足には勝てない世。」
タケが笑つたとき、三人分の通信機が一斉に鳴り出した。
和やかな空気が一瞬にして張り詰める。

代表してタケが取つた。

「こちらゴールデンビートルズ、竹本

卷之三

・・・・・ ああ、わかつた。じやあ、またな。

タカが重ターフマウントを闇一丸

「喜べ、一人とも。

「俺たちの勝ちだ！」

二 爰·詩·分·一·易

三人の通信機が一斉に鳴り出した。

「こちら青空決死隊、神宮司息吹。」

『こちらゴールデンビートルズ、竹本勇大。』

直ちに広場に集合して審査を行ふ。

『新編 五胡亂華史』

通話は一方的に断ち切られた。

「午後5時50分 出口」
「うわーっ、やーっと抜け出せたー。」

俺とゴズが轟林を抜け出してからちょうど5分後、「ニシの声と共にタケとツルが、多い茂る木々の向こうから現れた。「えつ、もう出てきたのかよ。俺たちの方が速いと思つたのに。」

タケが本当に残念そうに言つた。

「こつちはへンゼルとグレー・テルやつたから。」

ゴズのこのセリフは、俺が道に

割り箸のかけらを落としながら歩いたことを意味する。

「こつちはツルの第六感があつたのにな。」

ニシが言つからには、ここまでツルの勘だけに頼つて来たのだろう。まったく、恐ろしいヤツだ。

「それよりさ、アレ、見せてくれよ。」

ツルが急かすように言つた。

俺がずっと手に握んでいたものをみんなに見せる。

「おお～っ！」

「これ、ゴズの背中についてたんだろ？」

やつぱりゴズの運の良さには助けられっぱなしにな。

「ま、俺たちが勝つとは思つてたけどな」

「ピカピカしてるよ。」

タケも、ツルも、ニシも、ゴズも、俺もみんな目を輝かせていた。

そう言えども、俺たち、昔はこんな目をしていた。

いつの間に、輝かなくなつたんだろう。

でも、そんなことはもうどうでもいい。

今、輝いているんだから、それでいいじゃないか。

「おい、みんな、6時まであと5分もないぜ。」

遅れて到着なんてかつて悪いだろ、走れっ！」

タケの声で一斉に走り出した俺たちの足は、一直線に広場へと向かっていた。

最終決戦（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

この後続編に続くので、よかつたらそつちも読んでみてください。
タイトルは「続黄金の堅武斗虫～水面下の駆け引き～」です。
謎がいろいろと解けていく感じになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0881n/>

黄金の堅武斗虫 ~ミクロムーン島に眠る秘宝~

2010年10月17日04時42分発行